

社会福祉関連 QOL 測定尺度の開発

○ 同志社大学大学院 高橋順一 (8413)

黒木保博 (同志社大学・0979)、出井涼介 (岡山県立大学大学院・8500)、中嶋和夫 (両備介護福祉研究所・2000)

キーワード：社会福祉、QOL、妥当性、信頼性

1. 研究目的

近年、仕事や家庭生活上のストレスの増加、雇用情勢の悪化、若年者の自殺率や生活保護受給率の上昇、さらには人口の高齢化や少子化などを背景に、一般の成人や高齢者、また要介護高齢者、障がい者、児童など、全国民の QOL の維持・改善が強く求められている (中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会 1998 ; 久保田ら 2006)。QOL 研究は、社会政策領域においては「国民生活指標」や「幸福度指標」、保健医療領域においては疾患単位あるいは包括的な「健康関連 QOL 測定尺度」を用いて、異なる母集団の比較や介入効果に関する研究がなされている (Sirgy, 2001 ; 向井, 2004 ; 前田, 2009 ; Quality of Life 研究会, 2010)。ただし、社会福祉領域では、主として老年学領域の成果を援用して、高齢者の「主観的幸福感」(Lawton, 1975) や「生活満足度」(Neugarten et al. 1961 ; 古谷野, 1982 ; 1983)、「心理的 QOL 指標」(石原ら, 1992) などが検討されているものの、社会福祉領域独自の QOL 測定尺度及びそれを用いた実証研究はほとんど見あたらない(高橋ら, 2014)。このことは、独自の社会福祉関連 QOL といった側面からは、政策・事業・支援・予防等の介入効果が測定されていないことを示唆している。そこで本研究では、社会福祉的な介入の効果測定に資する尺度開発をねらいとして、一般的な成人のデータを基礎に、妥当性・信頼性を備えた社会福祉関連 QOL 測定尺度の開発を目的とした。

2. 研究の視点および方法

「社会福祉基礎構造改革について (中間まとめ)」(中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会, 1998) や、古川孝順の社会福祉の概念規定 (古川, 2002 ; 2012) などを参考に、社会福祉関連 QOL を「自立的な社会生活の質に対する満足感」と定義した。さらに、因子構造を「生活環境」、「人権の尊重」、「生活の自立」を第一次因子、「社会福祉関連 QOL」を第二次因子とする 3 因子二次因子モデルとして仮定した。「生活環境」因子には住環境、地域環境、人との絆の 3 項目、「人権の尊重」因子には自由権、平等権、個人の尊厳、安心・安全の 4 項目、「生活の自立」因子には経済的自立、社会的自立、地域生活自立、精神的自立の 4 項目の計 11 項目を配置し、尺度開発において欠かせない妥当性・信頼性を実証的に検討することとした。

調査対象は、A 県と B 県の保育所のうち選定した 14 カ所を利用している保護者とした。調査期間は 2013 年 11 月 20 日から 2014 年 3 月 1 日であった。最終的に 696 名分の調査票が回収できた。ただし、最終的な分析にはこれらのデータのうち、基本属性を含む分析

に必要なすべての項目に欠損値を有さない 652 名分のデータを使用した。統計解析では、社会福祉関連 QOL 測定尺度の因子構造の側面からみた構成概念妥当性の検討において、構造方程式モデリングによる確認的因子分析を行った。

3. 倫理的配慮

調査に際しては、保護者に対して倫理的配慮等を明記した調査票を準備し、各保育所にて同意が得られた保護者からのみ、封筒に入った調査票をあらかじめ保育所に設置した回収箱によって回収した。本研究は、同志社大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認を得た。

4. 研究結果

「生活環境」(3項目)、「人権の尊重」(4項目)、「生活の自立」(4項目)を第一次因子、「社会福祉関連 QOL」を第二次因子とする 3 因子二次因子モデルのデータに対する適合性は、CFI が 0.988、RMSEA が 0.066 となっていた。また、Cronbach の α 信頼性係数は社会福祉関連 QOL 測定尺度 11 項目では 0.881、下位因子ごとにみると、「生活環境」3 項目では 0.750、「人権の尊重」4 項目では 0.864、「生活の自立」4 項目では 0.838 であった。

社会福祉関連 QOL 測定尺度全 11 項目で測定された総合得点は、平均値 36.6 点、標準偏差 6.56、範囲 11~55 点であった。なお、歪度が -0.203、尖度が 0.513 と、概ね正規分布とみなされた。因子別の得点は、「生活環境」3 項目の平均値が 10.8 点、標準偏差 2.21、範囲 3~15 点、「人権の尊重」4 項目の平均値が 12.9 点、標準偏差 2.74、範囲 4~20 点、「生活の自立」4 項目の平均値が 13.0 点、標準偏差 3.06、範囲 4~20 点となっていた。

5. 考察

社会福祉関連 QOL 測定尺度の因子構造の側面からみた構成概念妥当性及び、内的整合性の側面からみた信頼性を検討することができ、社会福祉独自の QOL 測定尺度を開発することができた。なお、確認的因子分析により 3 因子二次因子モデルの構成概念妥当性を検討できたことは、社会福祉関連 QOL 測定尺度の概念的次元性を支持するものである。また Cronbach の α 信頼性係数が、0.881 であったことは、統計的な数量的次元性を支持するものであり、11 項目の加算性を裏付けるものである。

社会政策領域や保健医療領域における客観的状态や主観的満足感などの QOL 指標・尺度の概念及び因子構造とは異なる社会福祉領域独自のエンドポイントである QOL 測定尺度を本研究において開発できたことは、大きな意義があると考えられる。

以上のことから、本研究において開発した社会福祉関連 QOL 測定尺度は、政策や実践におけるインパクト評価に十分に用いることができると考えられる。